View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

学苑・英語コミュニケーション紀要　No. 870　61〜71（2013・4）

# 『説得』におけるアンとウェントワースの意義

金　子　弥　生

## Anne Elliot and Captain Wentworth as a New Type of Couple in *Persuasion*

Yayoi Kaneko

**Abstract**

Anne Elliot is quite different from Jane Austen's other heroines, all of whom suffer in the male-dominated society where women do not have the right of inheritance or to work to earn their living. Instead, each of these women is encouraged to become "an Angel in the House." Anne Elliot, however, is a new type of woman. She appears to be "an Angel in the House," but if we observe her well, we can see that she finds ways to express herself and gains the affection of Captain Wentworth eight years after refusing his proposal of marriage. In addition, she does not mind marrying Captain Wentworth, though he is not a landowner. Before the Industrial Revolution, the land-owning classes were considered "gentlemen," but this changed as time passed. The power of money strengthened and the landed gentry could not ignore this new power. Lady Russell is proud of her rank and persuades Anne not to marry Captain Wentworth because he is not a landowner. Their reunion after eight years, however, finds Anne to be willing to marry him, which is not only a revolutionary but also prophetic way of thinking.

ジェイン・オースティン（Jane Austen, 1775-1817）は，家父長制や長子相続制など男性中心社会で苦悩するジェントリー階級の女性たちを描いた。この時代が求めた理想の女性像は「家庭の天使」と呼ばれ，男性の補助的役割を果たす女性であった。彼女たちは相続権がないばかりか，働くことははしたないとみなされ自ら金銭を得ることはかなわず，安定した生活を送るためには結婚する以外に選択肢はほとんどなかった。結婚するために，理想の女性像を演じる，または演じることを強いられる女性たちが存在したのである。また，18 世紀後半から始まる産業革命をきっかけに，土地を基盤とした社会制度の主人公であったジェントリー階級の人々は脅威を感じ始めた。貿易などに携わり大金を手にし，あらたに中産階級に仲間入りした新興中産階級と呼ばれる人々が台頭してきたのである。

こうした事情を背景に描かれたオースティンのヒロインたちは，どのような女性なのだろうか。ウォルター・スコットによれば，オースティンは「現実により忠実な」「新しい様式の小説」を生み出した作家である。[1] 男性中心社会で生きぬくオースティンのヒロインたちは，家庭の天使となるべく努力を重ねるのではなく，いかに自分らしさを貫くかを模索したと言えるだろう。

『説得』（*Persuasion*, 1817）のヒロイン，アン・エリオット（Anne Elliot）は，オースティンの他の作品のヒロインが 17 歳から 21 歳と若く[2]，所謂結婚適齢期の女性であるのに対して，オールドミスと呼ばれる 27 歳の独身女性である。つまり，「他の作品が終わったところから始まる」[3] ユニークな

作品である。本稿では，オースティンが最後の長編小説『説得』において，女性にとって結婚難の時代となるヴィクトリア朝時代[4]に多く存在した立場の女性を主人公に据えながら，だれからも愛される精神的に独立した雄々しい女性の生き方を模索する新しいヒロイン[5]を誕生させた軌跡を考察する。

## 1. アンと家庭の天使

アン・エリオットはウェントワース大佐（Captain Wentworth）と婚約していた当時，教養豊かで美しい準男爵家の令嬢だった。年齢は 19 歳。8 年後，アンの前に再び姿を現したウェントワース大佐と結婚するであろうと皆が考えていたルイーザ・マズグローヴ（Louisa Musgrove）と同年齢に設定されている。ウェントワース大佐はやがてこのふたりの女性を比較することになるのだが，最終的にアンは彼に次のように言わしめるほどの印象を与えた女性である。

> A man does not recover from such a devotion of the heart to such a woman!—He ought not—he does not.[6]

アンと婚約していた当時のウェントワース大佐は，財産はないが「楽天的な性格」と「恐れを知らない精神」で自らの将来の出世を確信する「知性と活力と才気にあふれた素晴らしい」（p. 29）23 歳の青年であった。しかし，準男爵であることを自慢するアンの父ウォルター卿（Sir Walter Elliot）が「身分違いの結婚」だとしてこの婚約に反対しただけでなく，母を早くに亡くしたアンの母親代わりのラッセル夫人（Lady Russell）も次のように考えて反対する。

> Anne Elliot, with all her claims of birth, beauty, and mind, to throw herself away at nineteen; involve herself at nineteen in an engagement with a young man, who had nothing but himself to recommend him, and no hopes of attaining affluence, but in the chances of a most uncertain profession, and no connexions to secure even his farther rise in that profession; would be, indeed, a throwing away, which she grieved to think of!（p. 29）

結局，アンはラッセル夫人の忠告に従い，婚約を解消してしまう。8 年後，ウェントワースとの再会を果たすまでのアンは，ラッセル夫人の意に反して隠遁者のような地味な生活を送る。外出はほとんどしない，ごく限られた交友関係，舞踏会で楽しいときを過ごすことはない。当時の舞踏会は男女の出会いの場であり，適齢期の女性は特に積極的に参加する一大イベントであった。[7] アンが踊らないのは，婚約は解消したものの，彼女にとってウェントワース以外の男性は考えられなかったからである。“Oh! no, never; she has quite given up dancing. She had rather play. She is never tired of playing”（p. 78）とウェントワースの踊りの相手が彼に説明する声をアンは聞く。ピアノでダンス曲を弾き続けるアンを見て「ミスエリオットは踊らないのですか」と彼が質問したことを知るのである。踊らないことは結婚の意志がないと理解してもさしつかえなく，彼はアンが自分と別れて以来，踊りをやめた，つまり結婚する意志がない事を知る。作者はアンの将来を “As for herself, she might always command a home with Lady Russell.”（p. 158）と述べ，アンがウェントワース以外の男性との結婚をせずに，独身を貫く覚悟の表われを強調している。

アンはウェントワースとの婚約を解消したことに関して，ラッセル夫人が悪かったわけでも，夫人の言いなりになった自分が悪かったわけでもないと語る。財産もなく，将来に対する確たる見込みも

ないウェントワースとの結婚に夫人が反対するのは，母親代わりとしてアンの幸せを願う夫人としては当然の判断だ，ということであろう。子どもの幸せを願う気持ちが強すぎるが故に，しばしば親は意に反して一方的な愛情により子どもを不幸にしてしまうことがあるものだ。準男爵の地位を鼻にかけて身分違いの結婚だと反対する父とは異なり，自分の幸せを心から願ってくれるラッセル夫人の説得はアンの琴線に触れたに違いない。彼女は夫人の助言に従い，ウェントワースとの婚約を解消したのであった。結果的に父のことばに従った形となったアンは，家父長制のもとで父親に従うよき娘として振る舞ったことになる。それでもやはり 27 歳になったアンは自分の選んだ選択肢に満足していないことは，以下の記述から明らかである。

> How eloquent could Anne Elliot have been, —how eloquent, at least, were her wishes on the side of early warm attachment, and a cheerful confidence in futurity, against that over-anxious caution which seems to insult exertion and distrust Providence! (p. 32)

ウェントワースとの婚約解消後，22 歳になったアンは，チャールズ・マズグローヴ（Charles Musgrove）にプロポーズされる。ラッセル夫人は「温かい愛情と家庭的な習慣」のあるアンが幸せになれると思い，この結婚を希望していた。夫人のことばは，アンが一見家庭の天使的な性格を持っているような印象を読者に与える。おとなしく，従順で，愛情豊かなアン。しかし，アンはもちろん，この申し込みを断っている。

ウォルター卿には 3 人の娘がおり，末娘メアリー（Mary）は以前，アンにプロポーズしたチャールズ・マズグローヴと結婚している。29 歳になる長女エリザベス（Elizabeth）とアンは共に未婚で，父とケリンチ邸で過ごしているが，家庭でのアンは影が薄い。

> …Anne, with an elegance of mind and sweetness of character, which must have placed her high with any people of real understanding, was nobody with either father or sister: her word had no weight; her convenience was always to give way; —she was only Anne. (p. 6)

家族にとって「ただのアン」でしかない家庭で，アンの心は満たされない。父の浪費がたたり，ウォルター家は借金のため屋敷を貸してバースに引っ越すことになるが，その時でさえエリザベスは “nobody will want her［Anne］in Bath.”（p. 36）と言い放つ。一方，アンがいないとやっていけないと言う妹のメアリーの依頼で，アンはマズグローヴ家のアッパークロス屋敷に赴くことになる。メアリーは具合が悪いと言ってはアンを呼び寄せるのである。

> To be claimed as a good, though in an improper style, is at least better than being rejected as no good at all; and Anne, glad to be thought of some use, glad to have any thing marked out as a duty, and certainly not sorry to have the scene of it in the country, and her own dear country, readily agreed to stay. (p. 36)

自分が必要とされる場所に行くことは，アンにとって幸せなことだった。必要とされることで存在意義を感じることができるからである。アッパークロスでは，アンは話の聞き役として皆から必要とされ，しばしば彼女の判断を求められるのだった。自分の話はせずに相手の話を聞き続けるのは，家庭の天使の使命の一つでもある。物静かで，従順，愛情豊かで忍耐強く他人が満足するまで話を聞き続

けるアンに，人々は家庭の天使としてのイメージを見出すであろう。

マズグローヴ家はウォルター家に次ぐ大地主で，教養はないが愛情豊かな善良な一家である。愛情に飢えるアンは，マズグローヴ家の娘，ヘンリエッタ（Henrietta）とルイーザを知り合いの中でも一番幸せだと思いつつも“she［Anne］would not have given up her own more elegant and cultivated mind for all their enjoyments”（p. 43）と，自分の良さを心得ている。このようなちょっとした優越感は，アンに心の余裕を与えていると考えられる。

アッパークロスにウェントワースが来訪する前日，メアリーの長男チャールズ（Charles）が大けがをする。周囲であたふたする人々を尻目に，アンは冷静で適切な判断を次々に下し，指示を与える。

> His［Charles's］collar-bone was found to be dislocated, and such injury received in the back, as roused the most alarming ideas. It was an afternoon of distress, and Anne had every thing to do at once—the apothecary to send for—the father to have pursued and informed—the mother to support and keep from hysterics—the servants to control—the youngest child to banish, and the poor suffering one to attend and soothe; —besides sending, as soon as she recollected it, proper notice to the other house, which brought her an accession rather of frightened, enquiring companions, than of very useful assistants.（pp. 57-58）

アンは皆から指示を待たれ，彼女の存在感が示される。ここでは皆から必要とされる存在なのである。

その後，チャールズ坊やは順調に回復する。父チャールズはその回復ぶりを見て，母屋での食事会に出席すると言い出す。看病は女のすることで父は何の役にも立たない，というのが理由である。メアリーは母親だからという理由だけで食事会に参加できないのは納得がいかないと怒る。するとアンはチャールズの肩を持って次のように語る。

> Nursing does not belong to a man, it is not his province. A sick child is always the mother's property, her own feelings generally make it so.（p. 61）

そしてアンはメアリーの代わりに看病を進んで引き受ける。この自己犠牲的なアンの行為は家庭の天使的と言えるのだが，植松みどり氏は喜んで人の役に立とうとするアンが代役としての母親の役割を手にする一方，メアリーは母としての役割を放棄しているも同然と指摘する。[8] 心優しいアンにはもちろん，チャールズ坊やの看病を進んで引き受ける心づもりはあったであろう。しかし，ここでの彼女の思惑は，自らの意志に反して婚約を解消した相手，ウェントワースに会うのを避けることだった。皆が楽しく過ごす食事会でただひとりつらい気持ちに耐えるより，メアリーの家に残りひとり看病をする方がよほど楽だったのである。

ウェントワースとの再会後，ふたりはたびたび同席することになるが，彼の冷ややかな丁寧さやわざとらしいしとやかさから，彼が自分を許していないことをアンは知る。さらにメアリーを通じて，“You were so altered he should not have known you again.”（p. 65）という彼の自分に対する印象を聞く。8年という歳月を，外出も避け，ウェントワースを思い続けて過ごしてきたアンにとってはショックなことばである。彼女は“Altered beyond his knowledge!”（p. 65）を受け入れた。“So altered that he should not have known her again!”（p. 65）この言葉は彼女の心に付いて離れなかった。アンは自分だけがウェントワースを意識していたことに気づき，彼は自分を意識してい

ないと言い聞かせ，心を落ち着かせるのであった。

## 2. ウェントワースの女性観

ウェントワースの理想の女性は，“A strong mind, with sweetness of manner”（pp. 66-67）だという。他人の言いなりになって自分との婚約を解消したアンの「心の弱さと臆病さ」（p. 66）を許せないのである。そして彼は，アンを意識しているとしか思えない忠告をルイーザに伝える。

> It is the worst evil of too yielding and indecisive a character, that no influence over it can be depended on. —You are never sure of a good impression being durable. Every body may sway it; let those who would be happy be firm.（p. 94）

アンは図らずも木陰からこの発言を聞く。彼はなおも“If Louisa Musgrove would be beautiful and happy in her November of life, she will cherish all her present powers of mind.”（pp. 94-95）と続けるのだった。彼の言及で，アンは自分に対する彼の批判を理解するのである。

アンの「ほっそりした容姿ともの思わしげな顔」（p. 73）は，一見，青白い顔つきの家庭の天使を思い起こさせる。しかし，彼女には他人の意見に左右されない心の強さがある。希望も見出せぬ状況で密かに 8 年前と変わらずウェントワースを愛し続けているのである。

さて，ウェントワースの姉でクロフト提督（Admiral Croft）の妻クロフト夫人（Mrs. Sophia Croft）は，次のように描写されている。

> Mrs. Croft, though neither tall nor fat, had a squareness, uprightness, and vigour of form, which gave importance to her person. She had bright dark eyes, good teeth, and altogether an agreeable face;...Her manners were open, easy, and decided, like one who had no distrust of herself, and no doubts of what to do; without any approach to coarseness, however, or any want of good humour.（p. 52）

家庭の天使とは正反対の，元気のよいはきはきした明るい女性という印象である。クロフト夫妻は浪費を重ねた結果，貸しに出されたケリンチ邸の借り手となるが，夫人は夫とともに賃貸交渉にも参加し，提督よりも商売に明るいことが示される。“Mrs. Croft looking as intelligent and keen as any of the officers around her.”（p. 183）と，頭の回転も男性に引けを取らない。提督に代わり馬車の運転を行うほどの行動家でもあり，まさに男性と対等に渡り合える新しい女性と言えよう。ウェントワースは姉クロフト夫人宅をよく訪ねており，男性と同等に渡り合える姉の生き方を彼が認めているのは明白であろう。

では，周囲のだれもがウェントワースと結婚することになるだろうと考えるルイーザはどうであろうか。彼から心の強さを称えられたルイーザであったが，実は彼が彼女に次のような印象を持っていたことが後に述べられる。

> I regard Louisa Musgrove as a very amiable, sweet-tempered girl, and not deficient in understanding; but Benwick is something more. He is a clever man, a reading man—and I confess that I do consider his attaching himself of her, with some surprise.（pp. 198-199）

これは，婚約者を失い失意のどん底にあったベニック大佐（Captain Benwick）とルイーザが婚約したと聞いたウェントワースの感想である。ベニックの今は亡きフィアンセ，ファニー・ハーヴィルを “Fanny Harville was a very superior creature;”（p. 199）と，ルイーザとは比較にならないほど素晴らしい女性であったと述べる。賢く読書家のベニックとルイーザは釣り合わない，という考えである。ルイーザは「知性と活力と才気にあふれた」ウェントワースには，物足りない女性であったのである。

換言すれば，ウェントワースにとって理想の女性とは，自分の意見を述べず，常に忍耐し，従順であるという時代が求める「家庭の天使」的な女性ではなく，またルイーザのように自己中心的にやりたいことをあくまで行う向う見ずな女性でもない。つまり，教養があり，周囲の状況を理解したうえで自分の意見を述べ，判断できる女性，さらに男性にも劣らぬ行動力を身に着けた所謂新しい女性なのである。そして自己を持った女性を理想と考えるウェントワースもまた，新しい男性と呼んでさしつかえないであろう。

## 3. アンの変化

『説得』では，酷似した状況が繰り返される。

メアリーの長男チャールズ坊やの大怪我で，皆があたふたする中，アンだけが冷静な判断で次々に問題を処理していく。ライムでルイーザが突堤から落下して大怪我をした際も，アンの適切な判断が周囲の人々を救うことになる。ルイーザの怪我はチャールズ坊やの場合よりも深刻ではあったが，誰よりも落ち着いて対応することができた。意識のないルイーザを前にして兄チャールズもウェントワースもぼう然とする中，アンは冷静に適切な指示を次々に発することができる。

> Anne, attending with all the strength and zeal, and thought, which instinct supplied, to Henrietta, still tried, at intervals, to suggest comfort to the others, tried to quiet Mary, to animate Charles, to assuage the feelings of Captain Wentworth. Both seemed to look to her for directions.（p. 119）

大の男たちが彼女の指示を求めるほどに，アンは皆の信頼を得ているようだ。“Anne, Anne, . . . what is to be done next? What, in heaven’s name, is to be done next?”（p. 120）とチャールズは叫び，ウェントワースさえもが彼女の方を見つめるのである。

今までウェントワースから意識的に避けられていたアンは，この一件をきっかけに頼りにされる存在へと変化する。アンは自分だけの判断で行動できる女性，つまり精神的に自立した女性として認められたのである。ウェントワースはアンの素晴らしさを再認識し，彼女に対する彼の態度に変化が起こる。「昔がよみがえったかのような優しさ」（p. 123）がこもっているとアンは感じる。彼と初めて会った 19 歳のアンと不注意から大怪我をした 19 歳のルイーザ，その違いは歴然としている。

周囲の人々からの信頼感はアンに再び自信を持たせた。それと並行するように，アンの外見にも変化が現れる。ウェントワースに「わからないほど変わってしまった」と言われたアンであったが，以前の美しさを取り戻しつつあるのである。

婚約者の死にショックを受け，詩に没頭するベニックに，アンはウェントワースを失った自らの体験をもとにアドバイスする。アンの優しさに感動した彼は，アンに好意を寄せ始め，“Elegance, sweetness, beauty”（p. 142）とアンを称える。アンも彼の好意を感じ，ますます自分に自信を持つ。

心にちょっとした華やぎを感じたアンの表情は美しくなったに違いない。外見のみで判断するしかない第三者の客観的な視線でアンの容姿が次のように描写される。

> …Anne's face caught his [a gentleman's] eye, and he looked at her with a degree of earnest admiration, which she could not be insensible of. She was looking remarkably well; her very regular, very pretty features, having the bloom and freshness of youth restored by the fine wind which had been blowing on her complexion, and by the animation of eye which it had also produced. It was evident that the gentleman…admired her exceedingly. (p. 112)

突堤ですれ違った紳士が，アンの美しさに見とれるという場面である。それに気づいたアン自身は紳士の行動を十分に意識し，自分に美しさが戻ってきたことを確信したのではないか。さらに，その場に居合わせたウェントワースをアンは一瞥するが，もちろん，彼もこれに気づき，"That man is struck with you, —and even I, at this moment, see something like Anne Elliot again." (p. 112) と言わんばかりであることを見てとるのである。

精神的に自立し，美しさも回復したアンは，自信を深めてゆく。

> Anne wondered whether it ever occurred to him now, to question the justness of his own previous opinion as to the universal felicity and advantage of firmness of character;…She thought it could scarcely escape him to feel, that a persuadable temper might sometimes be as much in favour of happiness, as a very resolute character. (p. 126)

アンは，8年前の決断は間違っていなかったのではないか，そして，「断固たる性格」のルイーザも「他人の意見に従う性格」の自分も共に幸せになれるのではないか，と考え始めた。

バースで再会した例の紳士は，ウォルター卿の推定相続人のいとこエリオット氏（William Walter Elliot）であることが判明する。エリザベスとエリオット氏の結婚を期待するウォルター卿とエリザベスをよそに，エリオット氏はアンに心を寄せる。

一方，ウォルター家を毛嫌いし，エリザベスとの結婚を避けるために身分の低い金持ちの女性と結婚したエリオット氏が今になってなぜウォルター卿に近づこうとしているのか，アンには理解できなかった。外見の美しさがすべての判断基準である父にとって，エリオット氏の結婚相手が美人だったことは大きな意味を持つ。エリオット氏の亡き妻が美しかった，というだけの理由でウォルター卿の心は軟化し，彼を許すのである。この滑稽とも言えるウォルター卿の心情をアンには理解することができない。

> Mr. Elliot was too generally agreeable. Various as were the tempers in her father's house, he pleased them all. He endured too well, —stood too well with everybody. (p. 175)

アンにとって，エリオット氏の行動にはなにか引っかかるものがある。

ラッセル夫人は，以前のエリオット氏の行為に腹を立て，彼を許せないと思っていた。だが今，エリオット氏に会ってみると，"His manners were an immediate recommendation; and on conversing with him she found the solid so fully supporting the superficial," (p. 158) と見かけも中身もすばらしいと感心してしまう。そして，あれほど嫌っていたいエリオット氏とアンの結婚を望むので

あった。ラッセル夫人は “she had been unfairly influenced by appearances in each [Captain Wentworth and Mr. Elliot]”（p. 271）と，見かけ，つまり立居振舞いにとらわれすぎていたことを後に反省しなければならなくなる。

誰もがエリオット氏を絶賛する中，アンだけが彼の実態に疑問を抱くのはなぜか。彼女はその人の人間性そのものに興味があるからなのだ。

> She prized the frank, the open-hearted, the eager character beyond all others. Warmth and enthusiasm did captivate her still. She felt that she could so much more depend upon the sincerity of those who sometimes looked or said a careless or a hasty thing, than of those whose presence of mind never varied, whose tongue never slipped.（p. 175）

アンの考える人間的魅力は，すべてウェントワースに当てはまる。彼はマナーを重んじ礼儀正しい立居振舞いをしているが，一瞬，軽蔑の念や嘲笑的表情を見せたり，ファニー・ハーヴィルの素晴らしさを述べるふりをして，アンへの熱烈な気持ちを表現する。こうした正直な気持ちを垣間見せる瞬間に，アンは人間性を感じ取り彼を信頼できると思うのである。

立居振舞いを重んじるラッセル夫人も，もちろんアンの外見の変化に気づく。アッパークロスから戻ったアンは，久しぶりに夫人と再会する。夫人もまた，“Anne was improved in plumpness and looks”（p. 134）とアンが美しくなったことを喜んでいる。立居振舞いよりも容姿を気にするウォルター卿も “he began to compliment her on her improved looks;”（pp. 157-158）と，アンの容姿がよくなったことを指摘する。

バースでアンを見かけたウェントワースの知り合いの女性たちもまた，彼の前でアンの美しさを語り合う。

> “She is pretty, I think; Anne Elliot; very pretty, when one comes to look at her. It is not the fashion to say so, but I confess I admire her more than her sister.”
>
> “Oh! so do I.”
>
> “Anne so do I. No comparison. But the men are all wild after Miss Elliot. Anne is too delicate for them.”（p. 193）

アン自身，“she was to be blessed with a second spring of youth and beauty”（p. 134）と感じ始めた矢先，アンの美しさは誰の目からも明らかなものとなったのである。

## 4. したたかな計算

ルイーザとベニック大佐が婚約したと聞き，アンはウェントワースが自由の身になったとうれしく思う。クロフト提督からウェントワースがルイーザを愛していなかったことを聞きだし，音楽好きの彼に会う可能性が高い音楽会に出かけることにする。[9] 以前，親類のダルリンプル子爵未亡人（Lady Dalrymple）が暇つぶしにとウォルター卿らを急に自宅に招待したことがあった。その時アンは，リュウマチに苦しむ未亡人，スミス夫人（Mrs. Smith）との先約を理由に，この招待を断ったのである。社会的身分の高いダルリンプル夫人からの招待を必要以上にありがたがり，有頂天になる父と姉を見て，「もっとプライドを持ってほしい」（p. 161）とアンは思った。アンは子爵未亡人とその令嬢

を“…they were nothing. There was no superiority of manner, accomplishment, or understanding.”（p. 162）と全く評価していない。アンにとって大切なのは「子爵夫人」という社会的身分より，人物なのである。

ウェントワースが出席しそうな音楽会の日も，スミス夫人との約束の日であった。今回アンは，夫人との約束を延期してもらい，音楽会に出席する。ウェントワースに会う機会を逃すまいというアンの計算である。音楽会の幕間には，ウェントワースと話せるようにとわざわざ通路側の席を確保するという積極性を見せる。案の定，彼はアンに近づき話をする。だがここで，エリオット氏がアンに話しかけ，アンが彼に対応している間にその場を去ったウェントワースの行為が彼女には打ち震えるほどうれしかった。

> Jealously of Mr. Elliot! It was the only intelligible motive. Captain Wentworth jealous of her affection! Could she have believed it a week ago—three hours ago! For a moment the gratification was exquisite. But alas! there were very different thoughts to succeed. How was such jealousy to be quieted? How was the truth to reach him?（p. 207）

図らずもアンは所謂「つれなき美女」[10] を演じていたのである。アンは観察者の立場から，ついに主導権を握る。

27 歳，後がないアンは，運命を賭けウェントワースの気持ちを引き付けるべく，さらに大胆な行為に出る。ウェントワースに自分の声が聞こえると意識しながらハーヴィル大佐（Captain Harville）と男女の愛情について語り合うのだ。

> It is, perhaps, our fate rather than our merit. We cannot help ourselves. We live at home, quiet, confined, and our feelings prey upon us.（p. 253）

家庭の天使が女性の理想とされていた時代である。女性は控えめにして自分の心情を言わないのが常識であった。アンも自分の意見を大胆に主張することは躊躇される。そこで男女の愛情の特徴を述べるという一般論に置き換えて，自分の意見を間接的に述べる手法をとっている。ウェントワースが使用しているペンを落としたことで自分たちの会話を彼が聞いていることを確信したアンは，さらに続ける。

> All the privilege I claim for my own sex（it is not a very enviable one, you need not covet it）is that of loving longest, when existence or when hope is gone.（p. 256）

ベニックの婚約者だった妹のファニーならこんなに早く婚約者を忘れないとハーヴィル大佐は嘆くが，アンは女性の特性として，愛する人がこの世にいなくなり希望がついえても愛し続けると静かに語る。自分個人のこととしては決して語れない心情を，アンはファニーの代弁者という立場に立つことで女らしさを維持しながらも，臆することなく語るのである。アンのしたたかな計算であり，強烈な告白でもある。

アンの告白がウェントワースに手紙を書かせ，ついにふたりは結ばれる。“He［Wentworth’s brother］enquired after you very particularly; asked even if you were personally altered, little suspecting that to my eye you could never alter.”（p. 264）と言われたアンは，彼の愛を

再認識し，幸せに包まれるのであった。

ウェントワースは婚約解消後もアンが自分を恨んでいなかったことを知り，自身の過ちに気づいた。彼はアンを恨み，別れるようアンを説得したラッセル夫人を恨んだ。しかし，ラッセル夫人以上に，自分のプライドがアンへの気持ちを抑えつけていたのである。

> But I was proud, too proud to ask again. I did not understand you. I shut my eyes, and would not understand you, or do you justice. This is a recollection which ought to make me forgive every one sooner than myself.（p. 268）

ウェントワースがラッセル夫人と和解するのは時間の問題でしかない。

8年前を思い出し，アンは "I must believe that I was right, much as I suffered from it"（p. 267）と語る。母親代わりにアンの身を心配するラッセル夫人の忠告に従ったことでウェントワースに恨まれ苦しい思いをしたが，反対を押し切って結婚した結果味わうであろう良心の呵責のほうが婚約を思い切るよりつらかったと思われるから，と語り，「義務感の強いことは女の美点」（p. 268）と述べる。確かに『ロミオとジュリエット』（*Romeo and Juliet*, 1595-96）のロミオとジュリエットは両親の反対を押し切って秘密の結婚をした結果，両者とも命を落としてしまう。両親の子どもの幸せを思う一方的な愛情が，結果的にふたりを不幸に追いやったとも解釈される。[11] 幸い，ウェントワースにはすでに両親がなく，アンには母親代わりのラッセル夫人と父がいるだけである。その父はアンに興味はなく，ウェントワースの容貌が美しいことからもふたりの結婚に反対する理由はない。いまや年収2万5千ポンドと勲功とその働きにふさわしい地位を得たウェントワースと，美しさと自信を取り戻した教養あふれるアンの結婚に反対する者はいない。

メアリーはアンの結婚を喜んだ。というのも，アンはルイーザとヘンリエッタよりも身分が高くお金持ちになるが，自分のように地主の妻ほどの社会的地位がないことに満足しているからである。しかし，アンにとって社会的地位はあまり重要ではない。植松氏も指摘するように，準男爵という大地主の令嬢の立場からある意味不安定な職業軍人の妻になることは，「準男爵から新興の，ぎりぎりの紳士階級へと階段を下りていく」[12] ことを意味するかもしれない。しかし，アンにはアンの価値基準がある。見かけにとらわれず，中身を重視するのである。ウェントワースとの結婚はアンにとってすべての面で最高の結婚だったと言えるだろう。アンの結婚には土地制度の上に成り立つイギリスの階級制度が近い将来，崩れてゆくであろうことを予言するオースティンのメッセージが込められている。

本稿は昭和女子大学学長裁量費の助成を受けた研究である。

**註**

1 B. C. Southam, ed., *Jane Austen: The Critical Heritage*, vol. 1, London: Routlege & Kegan Paul, 1968, p. 63.

2 *Northanger Abbey* の Catherine Morland は 17 歳，*Sense and Sensibility* の Marianne Dashwood は 17 歳，Elinor Dashwood は 19 歳，*Mansfield Park* の Fanny Price は 10 代，*Emma* の Emma Woodhouse は 21 歳である。

3 A. Walton Litz, *Jane Austen: A Study of Her Artistic Development*, Oxford: Oxford University Press, 1965, p. 154.

4 J. A. and Olive Banks, *Feminism and Family Planning in Victorian England*, Liverpool: Liverpool University Press, 1964, p. 27. 参照。1851 年，15 歳以上の独身女性の数は独身男性の数より 72,500 人多かった。

5 Deirdre Le Faye, ed., *Jane Austen's Letters*, Oxford and New York: Oxford University Press, 1995, p. 335. From Jane Austen to Fanny Knight, 23 March 1817. "You may perhaps like the Heroine [Anne Elliot], as she is almost too good for me." 参照。

6 Jane Austen, *Persuasion*, Cambridge: Cambridge University Press, 2006, p. 199. 以下，本文からの引用はすべてこの版による。

7 他のオースティンの作品のヒロインたち，とくにキャサリン・モーランドとマリアン・ダッシュウッドは積極的に舞踏会に参加している。

8 植松みどり，『ジェイン・オースティンと「お嬢さまヒロイン」』，東京: 朝日出版社，2011 年，p. 155.

9 *ibid.*, pp. 157–159. 植松氏はアンの行動を「受身の傍観者が，実は積極的な観察者であり，いつでも救援者になり得る能力，揺るぎない意志を有していた」ことでつねに「用意のできている」状態にある，と指摘している。

10 中世ヨーロッパの騎士道精神に基づいた，男性が身分の上の女性を崇拝する宮廷恋愛という概念があった。この男性の愛に女性が応えず，つれなく接するという文学上の概念に基づき，女性は男性から言い寄られてもすぐに応じず，つれなく接するのがよいとされた。

11 河合隼雄，松岡和子，『快読シェイクスピア』，東京: 新潮社，1999 年，p. 43.

12 植松みどり，p. 167.

（かねこ　やよい　　英語コミュニケーション学科）